

## 『平家物語』における武士の「孝」と「忠」

### 一 孝と忠

「孝」と「忠」は一般に、儒教の概念として知られている。儒教に言う孝とは、(一)祖先の祭祀(招魂儀礼)、(二)父母への敬愛、(三)子孫を生むことの三行為をひくくする内容であることが、加地伸行によって指摘されている。また、儒教における「忠」は二つの意味を有している。忠信の語に示される心のありかたを表す場合と君臣関係(臣の君への)を律するものとして限定して捉えられる場合であることが、指摘されている<sup>2)</sup>。

「孝」と「忠」の単独の意味は基本的に、儒教倫理の二大徳目として、大体上述したように解釈されている。ところで、「孝」と「忠」は、日本においては、特に近代以降、「忠孝論」といういい方で一体化して議論されることが多い。日本において「忠孝論」は、特に徳川時代に入ってから、君臣関係を巡って盛んに行なわれるようになり、君臣論において、臣下の主君への絶対的恭順を説く所説が多い。それと関連し、後期水戸学などに代表されるように、「忠」と「孝」の矛盾相剋を撥無し、「忠孝無二・忠孝一致・忠孝一如・忠孝一本」を強調しつつ、実質的には「孝」に対する「忠」の優位を主張するものが多くなった。明治に入ると、近代天皇制国家の形成と共に、江戸時代の主君に対する「忠」を天皇に対するそれとして転換したのである<sup>3)</sup>。

一方、中国では、一時期を除いて、「忠」と「孝」の矛盾相剋が考えられる場合、原理的にはあくまで「孝」が「忠」に優先するのが一般的である。特に、「孝」を説く儒教の根本経典の一つである『孝経』に見られる「孝」は、父子

に限らず全人倫を律するものとして、さらには人倫を超えた宇宙的な原理なし理念として捉えられる場合がある<sup>4)</sup>。このことから「孝」が、中国の社会と国家にとっていかに重要な倫理であったかを知ることが出来る。そして、考慮しなければならないのは、儒教の説く「孝」以外に、仏教も大いに「孝」を説いていることである。歴史的に儒教との妥協調和の中で、仏教独自の「孝」の観念が形成された経緯があるからである<sup>5)</sup>。

日本においては、儒教経典の日本伝来に伴い、「孝」に対する認識は、主に天皇を中心とした貴族社会に浸透していったとされる。趙秀全は「古代天皇における孝徳―歴史書と物語を通じて」の中で、『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』といった歴史書と『源氏物語』における天皇の「孝」の用例を検証することによって、「有徳(筆者注…「孝」の徳)為君」という中国風の仁政思想を政治的意図で加える、という奈良時代から平安中期までの「孝」に関する受容相の一端を指摘している<sup>6)</sup>。そして、日本に伝わってきた「孝」も、単純に儒教の「孝」そのものではなく、中国の三教一致思想の影響を受け、当時の日本の律令国家という政治背景中で変容していった。例えば、奈良時代に唐から渡来した僧である法進は、『威儀経』に中国固有の忠孝観、あるいは礼教概念を盛り込み、その普及・実践を通じて唐代の理想的な護国仏教の実践を目指したという<sup>7)</sup>。つまり、僧侶によって日本にもたらされた仏教の中の「孝」は、儒教の「孝」の考えと混じり合いながら、当時の日本の上層部における、政治立場の維持や国家体制作りの道具、知識として利用された部分も大きかったのである。そのため、「孝」がどこまで当時の日本社会全体に

于 君  
(受理日二〇一三年十月三日)

広まっていたのかは、明らかでない。では、このような思想潮流の中で、古代・中世日本の国家政治思想との関わりの中で、「孝」と「忠」はどのようなものとして、そしていかに受容されていたのか。本論で考察する、『平家物語』の中からも、その一端がうかがわれるだろう。

## 二 平重盛における「忠孝」

『平家物語』の武士について語る場面において、明確に「孝」と「忠」という言葉として現れるのは、平重盛が登場してからである。そして、重盛については、特に「殿下乗合」事件後と、「鹿谷」陰謀事件が発覚してからの場面において、「孝」と「忠」が多く語られる。まず、この二場面を中心に、重盛が用いた「忠孝」の議論を検討し、「忠」と「孝」の意味及び、双方の関係について考えてみたい。

### (一) 「殿下乗合」事件後

平重盛の息子、平資盛が摂政殿のおでましに際し無礼を果たしたため、馬から落とされた事に対し、平清盛が重盛に相談せず、片田舎の武士を集めて摂政殿一行に恥をかかせた。このことを知った重盛が、参加した武士たちと息子を厳しく咎める場面に、「不孝」についての言及が出てくる。

「たとひ人道いかなる不思議を下知し給ふとも、など重盛に夢をばみせざりけるぞ。凡そは資盛奇怪なり。梅檀は二葉よりかうばしとこそ見えたる。既に十二三にならむずる者が、今は礼儀を存知してこそふるまふべきに、か様に尾籠を現じて入道の悪名をたつ。不孝のいたり、汝独りにあり」と、暫く伊勢国におひ下さる。

このように部下たちと息子を厳しく咎めた重盛の態度は、『平家物語』で「されば此大将をば、君も臣も御感ありけるとぞきこえし」と評される。重盛の言い分では、入道の悪い評判を立てることは「不孝の至り」なのである。ここから逆に、「孝」がいかなるものと意識されていたかがうかがえる。「家」の人の悪評を立てることが不孝であれば、逆に「家」に良い評判をもたらすこと、あ

るいは功名を立てることは「孝」であると言える。では、このような「孝」は重盛（の議論）に見られるのであろうか。

平清盛の悪行により、いろいろな恐ろしいことが起こった。神祇官や陰陽師の占いで百日の間、天下の大事があるとのことである（巻第三「魘」）。このようなことを聞いた重盛は大変心細く思い、熊野へ参詣に出た。以下、本宮証城殿の前で一晩中神に訴えた重盛の話を用用する。

親父入道相国の体をみるに、悪逆無道にして、ややもすれば君をなやまし奉る。重盛長子として、頼りに諫をいたすといへども、身不肖の間、かれもつて服膺せず。そのふるまひをみるに、一期の栄花猶あやふし。枝葉連統して、親を顕し、名を揚げん事かたし。此時に当つて、重盛いやしうも思へり。なまじひに列して、世に浮沈せん事、敢へて良臣孝子の法にあらず。

父である平清盛の目に余る悪行を心配しながら、それを止められない自身の非力を嘆く重盛の心情が叙述されている。重盛は、清盛のような「君をなやまし奉る」、不忠な行いをしてしていると、子孫が親に打ち続くことによつて代々親の名を後世に残し続けることは困難になると考えている。さらに、無理に身に余る重臣に列して、世間を不安定にさせることは、「良臣孝子」の道ではないと述べている。

では、「良臣孝子」はどのようなものなのか。まず「孝」について、重盛の言い分の中の「親を顕し、名を揚げん事」は、『平家物語』の注釈にもあるように、「立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也」<sup>1)</sup>という儒教倫理の「孝」と共通している。つまり、我が身を以て正しいことを行うことによつて、自分の名を後世に残すことが父母を顕彰することになり、これこそ「孝」の最終目的なのだという意味である。ここでは、重盛にとつての「孝」は、「名を揚げて、父母を顕彰する」ものとして描かれている。そしてこのような「孝」を実行する前に、彼は「枝葉連続して」と強調している。「子孫を生む」（子孫繁栄）という儒教倫理の「孝」の内容から考えると、重盛にとつての「孝」は、父である清盛だけではなく、平家一門全体の祖先に対する「孝」でもある。以上のように、ここに見られる重盛の「孝」は、儒教倫理としての「孝」の意味が強いように思われる。

次に、「良臣」はどのようなものなのか。「なまじひに列して、世に浮沈せん

事、敢へて良臣孝子の法にあらず」という重盛の言い分を逆転して考えれば、身分相応の官職に就き、世間を安定させることができる人、つまり君にも民にも貢献できる人こそ「良臣」と言える。

ここでの考察から、重盛に見られる「孝」と「忠」は、「天下（君と臣の両方）において臣としての役目をきちんと果たせば（忠の考え）、一族において孝ともなり、一族における孝が、天下に対する忠にも繋がる」という関係にある、と一応整理することが出来るだろう。

## (二) 「鹿谷」陰謀事件発覚後

上述した重盛の「忠」と「孝」は、摂政家・息子資盛・父清盛及び「家」・国の「臣」としての自分自身、という複雑な人間関係に見られるあり方である。しかも、「忠」と「孝」は相関するものであり、そこには矛盾が見られない。では、単に専制政治を目指す主君の後白河院と、横暴な独裁者である父清盛との軋轢の狭間に立った際に、重盛はどのような決断をしたのだろうか。

鹿谷の平家打倒の計画が発覚した後（西行被斬）、清盛は後白河院を軟禁しようとする。これを知った重盛は、清盛のいる西八条邸へ駆けつけ、武装した清盛に教訓し始める。

（前略）太政大臣の官に至る人の、甲冑をよろふ事、礼義を背くにあらずや。就中御出家の御身なり。夫三世の諸仏、解脱幢相の法衣をぬぎ捨てて、忽ちに甲冑をよろひ、弓箭を帯しまさむ事、内には既に破戒無慙の罪をまねくのみならず、外には又、仁義礼智信の法にもそむき候ひなんず、かたぐ恐ある申事にて候へども、心の底に旨趣を残すべきにあらず。まづ世に四恩候、天地の恩、国王の恩、父母の恩、衆生の恩、是なり。其なかに尤も重きは朝恩なり（…中略…）なかにも此一門は、代々の朝敵を平げて、四海の逆浪をしづむる事は、無双の忠なれども、其實に誇る事は、傍若無人とも申しつべし（…中略…）君と臣とならぶるに、親疎わくかたなし。道理と僻事をならべんに、急でか道理につかざるべき。

重盛は、儒教と仏教、古今東西の知識を用いて清盛に長い教訓を述べたにもかかわらず、彼が言いたい究極な一点は、最後の一句「君と臣とならぶるに、親疎わくかたなし。道理と僻事をならべんに、急でか道理につかざるべき」と

いうことである。すなわち、後白河院を軟禁するのは臣としての「不忠」の行為であり、臣は君（後白河院）に従うのが道理である。しかし、後白河院に対して忠臣としての立場を取ろうとすれば、父清盛に対して孝子を貫くことが出来なくなる。

悲しき哉君の御ために、奉公の忠をいたさんとすれば、迷廬八万の頂より猶かたき、父の恩忽ちに忘れんとす。痛ましき哉不孝の罪をのがれんと思へば、君の御ために既に不忠の逆臣となりぬべし。進退惟合れり。是非いかにも弁へがたし。申しうくるところ詮はただ重盛が頸を召され候へ。さ候はば、院中をも守護し参らすべからず、院参の御供をも仕るべからず。

大変苦悩する重盛の様子が描かれている。主君後白河院と父清盛との板挟みになった重盛は、奉公の忠を果たそうとすれば、父の高い恩を忘れる不孝の罪にあり、後白河院に逃れようとするれば、不忠の逆臣になる、と言っているのである。つまり、後白河院に対する「忠」と、清盛に対する「孝」のどちらを選ぶかについて、重盛は大変当惑している。続く場面で重盛は、「申しうくるところ詮はただ重盛が頸を召され候へ。さ候はば、院中をも守護し参らすべからず、院参の御供をも仕るべからず。つまり自分の頸を取ることで、「忠」と「孝」の両方を両立させようとする。このように、「忠」と「孝」が大きく矛盾するたために、重盛は自己犠牲の決断をせざるを得ないのである。

重盛が主君と父との板挟みになって、自分の頸を取つてくれと訴えるこの場面から、実は多くの情報が読み取れる。「しかれば院中に参りこもり候べし。其儀にて候はば、重盛が身にかはり、命にかはらんと契りたる侍共、少々候らん。これを召しぐして、院御所法住持殿を守護し参らせ候はば」（巻第二「烽火之沙汰」と重盛は言いながら、「さすがに以ての外の御大事でこそ候はんずらめ」と付け加えたのである。要するに、重盛の自己犠牲の決断は、武力を駆使し父清盛と真正面からぶつかる、あるいは父を拘束するのを諦めたことを意味する。重盛は生きている間に、清盛の法皇への軟禁を止めることが出来たので、法皇への「忠」を一旦果たしたと言えよう。しかし、彼の死後、わずか三か月後に、清盛は法皇への幽閉を強行した（巻第三「法皇被流」）。重盛も生前にこのことを察知していたのである。それにもかかわらず、父と正面からぶつからず、ただ一族と自分の救済を神仏に委ねるのである。父清盛の法皇への軟禁を

徹底的に止めさせる決意であれば、軍を集め後白河法皇を守る、又は父清盛を拘束するのが得策であろう。こうしてこそ、主君である後白河法皇に対する本當の「忠」になる。しかし、彼はそのような行動をしなかった。ここには、あくまでも父への「孝」を貫こうとする重盛の様子が鮮明に描かれているのではないだろうか。

このような重盛の父清盛に対する態度について、前掲『仏教と儒教倫理』の中で、道端良秀は、儒教倫理の「孝」の教えに基づき、次のように述べている。

親と子の関係は、絶対者と服従者、尊と卑との、上下の倫理的關係にあつた。「儀礼」の喪服伝に、「父は子の天なり」とあることは、父をもつて絶対的な専制君主と同じということで、親子の關係は、天子と臣下との關係と同じで、親は子に対して、無條件の服従を強要することができ、子は天子たる親に、絶対的服従があつたのである。我が国においても、敗戦以前は殆どがこの通りであつた。平重盛の忠とならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず、というあの立場は、全くこの儒教の孝のおしえなのである。

道端が述べた通り、儒教の「孝」は上下尊卑の關係にある。しかし、重盛の父清盛に対する「孝」は、父への絶対的服従かと言えば、そうではない。後白河院の幽閉は、清盛の立場からすれば後白河院は平家の恩に仇で報いたからこぞ行つた行為である。それゆえ、父の武装軍団に加わつて、後白河院を拘束することこそが、父清盛への絶対的服従と言える。その意味で、ここでの重盛の「孝」は大きく言えば、道端のいう儒教倫理の「孝」と言つても間違いないであろう。しかし、重盛の言動の真意が父の後白河法皇の幽閉を阻止することにあることを考慮すると、ここに重盛に体现されている「孝」は、むしろ「諫言」という意味での「孝」に近い部分が大いのではないだろうか。物語の中で描かれた重盛には、言葉と理で不忠に走る父清盛を諫め、子孫代々の繁栄を願おうとする「孝」の立場と、主君後白河院に逆らわず、臣としての本分を全うする「忠」の立場の両方がある。「忠」と「孝」のどちらも捨てられなかつた重盛だからこそ、当時の人々に「忠臣孝子」として高く評価されたのである。しかし、出家して父に先だつた彼の最終選択は、今後も後白河院と衝突する可能性のある父に諫言することを諦めたことを意味する。それは後白河院に対して

いえば、不徹底な「忠」であるとも言える。その反面、事実上、父清盛への「孝」をより優先したとも読み取れるだろう。

### 三 「孝」のついで

上述したように、重盛は平家全体を考慮に入れ、息子を教訓した時に用いた、「名を揚げて、父母を顕彰する」という考え、そして主君後白河院を軟禁しようとする父の前においても、一族の繁栄を考え、諫言という形で父と応対する。こうした彼に見られる平家全体と父への「孝」には、儒教的要素が強いように一見見える。しかし、後に重盛がとつた行動には、儒教の説く「孝」と相容れない側面が見られる。重盛は出家し、かつ父清盛に先立って死んだのである。出家することと親に先立つということは、儒教「孝」論において大不孝とされることとがらである。しかし、この二つの「不孝」について、『平家物語』では批判していない。その理由の一つとして考えられるのは、『平家物語』の中に、儒教とは異なるもう一つの考え方があつたからである。すなわち、仏教思想の受容が、当時の人々の生と死への態度に与えた影響の大きさは無視できないと考えられる。そこで、次に、祇王と藤原成経を取り上げ、重盛に見られる「孝」と対照させながら、当時の人たちにおける「孝」の異なる表れ方を考えてみたい。

#### (一) 「今生の孝養」と「後生の孝養」と

##### ・今生の孝養

一度平清盛に実家に帰された祇王が、その後、清盛の手紙に返事をしない姿勢に対し、母とちが祇王を教訓する話のなかで、「今生後生の孝養」という言葉が出て来る。『平家物語』注釈者市古貞次は、「親孝行の意と、死者のために追善供養すること、後世を弔うこととの意とがあり、ここでは、両方にかけている」と解釈している。つまり、それは、生前の親に孝行を尽くすことと、死後の親の為に冥福を祈つて行う供養（仏教の考え）の意味である。母とちの話を聞いて、祇王がとつた「親の命をそむかじと、泣く／＼又出で立ちける」という選択は、死ぬまで都に住み続けたい母とちの希望に沿う為であり、ある意味で親への服従である。『孝経』の中に祇王の選択を説明できる名文がある。すなわち、「孝子之事親也、居則致其敬、養則致其樂、病則致其憂、喪則致其哀、

祭則致其嚴<sup>20</sup>」である。生前から死後にかけての親への「孝」を説いている。祇王の選択は生前の親への「孝」となる。そして具体的には、母と子の命令に反抗しないというとちへの「居則致其敬」の「孝」と、清盛に逆らいさえしなけば、今後も母を穏やかに都に住ませることが出来るという「養則致其楽」の「孝」である。

このように、祇王は母とちに「今生の孝養」を尽くすことを選択した。ここでの「孝」は依然として儒教的要素が強いように見える。では、とちの言葉にある「後生の孝養」、いわゆる死者の為に、仏教儀礼として追善供養する行為は、『平家物語』の中でどのように儒教の「孝」思想と関わっているのか。次に、藤原成経の例で考えたい。

#### ・後生の孝養

藤原成経が備前児島に父の墓を訪ねる場面の一部を引用する。

康頼入道と二人、墓のまはりを行道して念仏申し、明けぬれば、あたらしう壇つき、くぎぬきさせ、まへに飯屋つくり、七日七夜念仏申し経書いて、結願には、大きな卒兜婆をたて、「過去聖霊、出離生死、証大菩提」と書いて、年号月日の下には、「孝子成経」と書かれたれば、しづ山がつけり<sup>21</sup>。

亡き父を敬慕し、悲哀を極める成経の様子や、子の父への強い「孝行」思想が人々の心を打って、「涙をながし袖をしほらぬはなかりけり」と評されている。このような成経の様子は、儒教の「孝」思想（前述「喪則致其哀」）と共通する部分もある。一方、彼が実際に行った、壇を築き、柵を作り、念仏し経を書くという一連の行為は、明らかに仏教儀礼としての追善供養の方式である。田中徳定は『孝思想の受容と古代中世文学』の中で、「古代・中世日本の場合、儒教の孝思想としての祖先祭祀は、既に奈良時代から仏教儀礼として行なわれてきたものであった」と述べている。ここからも、儒教の「孝」思想が仏教と共に関わりあいながら、当時の人々の意識の中に共有された姿を見出すことが出来るだろう。

#### (二) 「不孝」か、「名」を重んじるか

以上述べてきたように、平氏武士に見られる「孝」が表出される一方、『平家物語』においては、一見全く「不孝」とも言える行為が、源氏武士に対して語られている。「富士川」の合戦で、平氏側の大將平維盛は、実盛を呼んで東国の兵の様子について尋ねた。そこで、実盛は

さ候へば君は実盛を大矢とおぼしめし候歟（…中略…）いくさは又、親もうたれよ子もうたれよ、死ぬれば乗りこえ乗りこえたたかふ候。西国のいくさと申すは、親うたれぬれば孝養し、忌あけて寄せ、子うたれぬればその思歎に寄せ候はず……<sup>22</sup>

と答えた。文学的な誇張はさておき、この実盛の話は、平家方西国武士と、源氏方東国武士の気質の違いを表わしたものと読み取ることが出来るであろう。しかし、「孝」の考えが、源氏武士には全くなかったのだと言ってしまうと、それもまた軽率である。小澤富夫は、「親もうたれよ子もうたれよ、死ぬれば乗りこえ乗りこえたたかふ候」という箇所をとり上げ、「親も妻子もわが身を捨てて顧みない」という「死のいさぎよさが覚悟されている」武士の「気質」を問題としている。また、アレキサンダー・ベネットもこれに同調し、「戦いの勝敗や己の生命よりも『名』を惜しみ、『恥』を重んずる思想が形成されてきた」と述べる。坂東武者の描写においては、「孝」と「忠」とは、また別の問題が提示されていると考えるべきなのであろう。

#### 四 「忠」についで

##### ・平重盛の「忠」

官位を持つ朝廷の「臣」としての重盛に見られたのは、主君である後白河院及び天下（国家）を対象とした「忠」であった。そして、重盛の後白河院に対する「忠」は、特に父清盛の前において初めて「孝」と矛盾してくるのである。では、重盛の論に見られる臣の君への「忠」の内容が、それ以外の武士の場面で見られないのは、なぜであろう。

まず、『平家物語』というテキスト全体における重盛の位置づけから考えてみたい。「忠臣・孝子」を持って父と応じた重盛について、『平家物語』は、

「国に諫むる臣あれば、その国必ずやすく、家に諫むる子あれば、其家必ずただし」といへり。上古にも末代にもありがたかりし大臣なり」と評価している。つまり、重盛は、国にとつても、平家にとつてもきわめて重要な存在として描かれている。確かに、重盛が生きている間、「忠孝」を武器にして父を説得し、教え悟らせることによって、父清盛と主君後白河院の関係は辛うじてバランスが保たれ、天下は比較的安泰していたのである。また、平家の繁栄もいったん維持されている。しかし、重盛の死後、彼のように国と父の為に諫める者、「忠」と「孝」の均衡が取れている存在は描かれない。その後、清盛と後白河院のバランスが完全に崩れ、平家の滅亡が始まるだけではなく、国も戦争に巻き込まれて乱れていく。『平家物語』全体のストーリー展開の中から、そのように考えてみることもできるのではないか。

#### ・家来の主人に対する「忠」

平重盛に見られる「忠」について（「孝」も含め）、津田左右吉は、それは作者（語り手）が儒学や仏典の文字上の知識を持った僧徒であったためだと、書き手の問題とする。たしかに、血まみれの戦場における話ではなく、「机上の空論」にも見え兼ねない重盛の「忠臣・孝子」を、そうした思想的産物だと考えることも可能だろう。しかし一方、津田は「武士を支配してゐる道徳思想は、彼ら自身の生活から自然に生まれたものであつて（…中略…）厳格なる義務として遵奉せられるよりは自然の情誼として実際の行動に現はれるものである」とも指摘する。津田のこの指摘を念頭に、次に、戦の場、特に生死の関頭における主人と家来という主従関係の場面から、「忠」についてあらためて考えてみたい。

『平家物語』の中には、特に今井兼平と木曾義仲のエピソード（巻第九「木曾最期」）に見られるように、主人と最期を共にする家来の姿が描かれている。あるいは、嗣信に見られるように、主人源義経の為に命を失う家来も描かれている（巻第十一「嗣信最期」）。しかしながら、このような家来の主人に対する感情を、『平家物語』では、「忠」または「忠実」という表現では評価していない。その理由については、すでに別に論じたので、概略のみを記しておく。主君の死後を追って自害した今井兼平は、主君に「忠実」を示す側面は見られなくはないが、それまでの主従二人のやり取りを見て分かるように、主君の木曾義仲も今井に対する深い「情」がある。主君を庇う為に命を失った嗣信の場合

も同様な説明が出来る。要するに、今井兼平・木曾義仲と、嗣信・義経に見られるのは、重盛の場合に見られる臣の君への一方的な「忠」ではなく、主君の家来に対し、家来の主君に対する双方向の作用としての「情」が描かれているのである。家来の今井兼平と嗣信は、究極の形である「死」を以て、平時「情」のある主君に応えたのである。そして、それは単純に「忠」という言葉で言い尽くせない面があると考えられるだろう。

アキレサンダー・ベネットは「主君の死後に自害したという事例は初期の軍記物語にも見られ、それを殉死と見なすこともできなくはないが、「忠」を示すための風習といった形を取り始めるのは、『太平記』（一三七〇）以降のことである」と述べている。後代になると、「殉死」は、主従関係における、「忠」の象徴とされるに至るが、主君の死後に自害した今井兼平の行為は、主君に「忠」を示す行為であるにもかかわらず、『平家物語』においては、未だそれに特別なことばが与えられていない。

こうしたことから考えれば、「忠」といった考えは、『平家物語』当時、まだ貴族社会を除いた広範囲の人々に深く受容されていなかった面があるのではないだろうか。今井兼平と嗣信の主君に対する行為は「忠」のある行為かもしれないが、しかしながら、それを単に「忠」という言葉で評価してしまえば、当時の武士の「気質」を見る上では偏ったとらえ方になるだろう。『平家物語』においては、そうした行為が、主君と共に苦楽を経験した中で、固い絆で結ばれた主従関係にしか見られない、自然の情誼の発露である「情」として描かれていると言えよう。

## 五 おわりに

本稿では、平重盛を出発点として、武士の「孝」と「忠」について考えてきた。平重盛に見られる「孝」は、父及び平氏一族全体を対象とする。一方、「忠」の対象は、主君後白河院及び天下（国家全体）である。そして、後白河院に対する「忠」と、父清盛に対する「孝」は、矛盾するものとして描かれている。それにもかかわらず、「忠」と「孝」の葛藤の中で、特に彼の生前において、なんとか「忠」と「孝」の両方を堅持できた重盛は、『平家物語』の中で高く評価されている。

まず、重盛に見られる、父に対する「諫言」という意味での「孝」と共に、

祇王と藤原成経に見られる「孝」の一側面は、儒教の倫理道徳としての意味が強いように見える。そして、藤原成経の父に対する「孝」からは、儒教の「孝」思想が仏教と共に関わり合いながら、当時の人々の意識の中に共有されていた姿がうかがえるだろう。

また、坂東武士について考察したように、戦場では彼らの「親も妻子も顧みない」その行動は、「不孝」とは語られず、逆に「名」を重んじる武士の「気質」として描かれている。そして、家来の主人に対する言動を、「忠」と評価されることなく、主従双方のお互いへの「情」として語られている。『平家物語』では、貴族的な生活をしてきた平家方の西国武士平重盛に対するとは違って、坂東武士に対して、特に明確に「孝」や「忠」といった言葉では評価していない。

以上、検討してきた結果から、次のことが言えるであろう。すなわち、『平家物語』当時においては、一見儒教の説く「孝」は上層部の貴族社会を中心としながらも、仏教と一体化した中で、祇王・とちらのような一般庶民の間にも普及した様子がうかがえる。一方、「国の臣」としての平重盛以外の武士について、「忠」より、主従相応の「情」として描かれることから、「忠」はたいいて儒教意味での臣の君への一方的なものとして受け入れられ、まだ当時のより広範な人間層にわたっては普及されていなかったと言えよう。

【注】

- (1) 加地伸行『儒教とは何か』中公新書、一九九〇年、一九頁、参照。
- (2) 子安宣邦監修『日本思想史辞典』ベリかん社、二〇〇一年、(佐久間正の「忠孝論」、三五五頁)、参照。
- (3) 前掲『日本思想史辞典』、三五五頁、参照。
- (4) 前掲『日本思想史辞典』、三五五頁、参照。
- (5) 道端良秀『仏教と儒教倫理—中国仏教における孝の問題—(平楽寺書店、一九六八年) 参照。道端は同書の中で、仏教倫理の「孝」として、「出家」と「報恩」などを挙げている。しかし、「出家」は儒教にとっては、全く不孝な行為であった。仏教の説く「孝」と儒教倫理としての「孝」の違いが、同書の中に詳しく論じられている。
- (6) 『アジア遊学No.51』(東アジアの王権と宗教) 勉誠出版、二〇一二年、

九二—一〇二頁)。

- (7) 浄土宗の僧、聖岡は、中国仏教以来の儒仏一致の伝統を受けながら、儒教と仏教との差異を提示し、特に浄土宗における孝道を、それまでに解釈された人為的な道徳観念の域を超えた古よりの自然の法である、と位置付けた(鈴木英『中世学僧と神道—了誉聖岡の学問と思想』勉誠出版、二〇一二年、参照)。

- (8) 富樫進『奈良仏教と古代社会—鑑真門流を中心に—』東北大学出版会、二〇一二年、六七—八九頁、参照。
- (9) 市古貞次校注・訳『平家物語①』、小学館、一九九四年、六六頁。
- (10) 前掲『平家物語①』二二六—二二七頁。
- (11) 加地伸行・全訳注『孝経』(「開宗明誼章 第一」) 講談社学術文庫、二〇一〇年、二六頁。
- (12) 前掲『平家物語①』、一三五—一三七頁。
- (13) 前掲『平家物語①』、一三七—一三八頁。
- (14) 巻第三「医師問答」の中で、熊野本宮証城殿の前に立った重盛が、「南無権現金剛童子、願はくは子孫繁栄たえずして、仕へて朝廷にまじはるべくは、入道の悪心を和けて、天下の安全を得しめ給へ。栄耀又一期をかきつて、後昆恥に及ぶべくは、重盛が運命を縮めて、来世の苦輪を助け給へ。両ヶの求願、ひとへに冥助を仰ぐ」(巻第三「医師問答」)と切に祈っている。重盛は父入道の悪逆無道を認め、その悪行が自分に自分の力及ばぬものであることを認識したからこそ、現世を諦念し、来世への期待の心が生まれたのである。
- (15) 前掲『仏教と儒教倫理—中国仏教における孝の問題—』、二七—二八頁。
- (16) 平家の恩とは、保元・平治の乱以来、「代々の朝敵を平けて、四海の逆浪をしづむる」(巻第二「教訓状」)ようなことである。
- (17) 前掲『孝経』(「講談社学術文庫」)の中で、加地伸行は『孝経』各章の特色を述べる際、『孝経』の第十五章「諫争」に対し、「この章は特異である。孝といえは、親が子に対して絶対的服従を強いるようなイメージがある。しかし、『孝経』はそうとはしない。親にも過ちがあることを認め、そうした不義に対して諫言すべきであることを説く。しかも親子間の問題だけとはしないで、天子・諸侯・大夫それぞれにおいてその臣は諫言すべきとする。士の場合、友人が諫言をすべきとする。つまり、孝は人間関係において絶対服

従というような単純な意味ではない事を主張している」(一四二頁)と述べている。

(18) ただ、注意しなければならないのは、重盛の実際の行動から「孝」の優位が見られたにもかかわらず、「忠」と「孝」のどっちも捨てたくない彼の気持ちの方がより鮮明に描かれていることである。武田昌憲も「平重盛『平家物語』の孝子説話」の中で、「重盛が忠臣・孝子の印象が強いのは、父清盛の悪行に全く加担することなく、その否を理路整然と父の前で論破し、悟らせるところにある」(『アジア遊学』101頁)(特集『アジアの孝子物語』勉誠出版、二〇〇八年、二八頁)と述べている。すなわち、父の不忠な行為に諫言し、それを止めさせようとしたことは、主君後白河院に対する「忠」である。と同時に、武力を使わずに言葉で父清盛に諫言したその行いは、父への「孝」でもあると評価されたわけである。

(19) 前掲『平家物語①』、四二頁。

(20) 前掲『孝経』(講談社学術文庫)、七四頁。

(21) 前掲『平家物語①』、二二頁。

(22) 田中徳定『孝思想の受容と古代中世文学』、新典社、二〇〇七年、二五頁。

(23) 前掲『平家物語①』、四〇一―四〇二頁。

(24) ただ、小澤富夫はこれについて説明する際、「坂東武者の習、大將軍の前にては、親死に子撃たるれども顧ず、弥が上に死に重つて戦ふとぞ聞く」と、『保元物語』から引用した。そして、『保元物語』では、それは源為朝の話だとされる。

(25) 小澤富夫『武士の行動の美学』、玉川大学出版部、一九九四年、一〇頁。

(26) アレキサンダーベネット『武士の精神とその歩み―武士道の社会思想的考察』、思文閣出版、二〇〇九年、三三三頁。

(27) 前掲『平家物語①』、一四三頁。

(28) 津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究』(三) 岩波文庫版、一九七七年、一一三―一四頁(初出は一九一七年)。

(29) 前掲『文学に現はれたる我が国民思想の研究』(三) 岩波文庫版、一九七七年、一一四―一五頁。

(30) 拙稿『『平家物語』における武士の「情」について』(『広島大学日本語教育研究第二三号』の四一―四八頁に)を参照されたい。

(31) 前掲『武士の精神とその歩み―武士道の社会思想的考察』、一一二頁。



The “Kou” and “Tyu” of Samurai in *Heike monogatari*

Yu Jun

**Abstract:** Generally speaking, Kou and Tyu are the concept of Confucianism. And, as we know, They were introduced into ancient Japan from China before an early time.

From the Tokugawa Era, there has always been an argument between Kou and Tyu. While, in China, Kou was taken much more seriously than Tyu. More important is that, Kou was also asserted in Buddhism. So, the concept of Kou was changing between Confucianism and Buddhism.

When the Confucianism books were brought into Japan, from Nara Era to the middle of Heian Era, Kou was mainly accepted by the aristocracy class with its contribution to the building of the law country. It is not sure that, whether Kou and Tyu were also widely accepted by the other classes or not. In *Heike monogatari*, there is also some description about Kou and Tyu. I will try to make a study of *Heike monogatari* to think about the meaning of Kou and Tyu, and how they were be accepted by the Samurai.

Key words: *Heike monogatari*, Samurai, Kou, Tyu

キーワード：平家物語, 武士, 孝, 忠